

ハイデガーに於ける真理の本質

－正しさを可能にする根拠と形而上学の克服－

山口大学教育学部 社会科教育選修4年 花本 直美

1. はじめに

マルティン・ハイデガー (Martin Heidegger) は「真理」について、単なる事実の表面的な一致ではなく「存在」との深い関わりがあると考えている。「絶対的なもの」ではなく、それが「存在する」という事実を追求するハイデガーの真理論に興味を持ち、彼の思索を明らかにしたいと考えた。『真理の本質について』という講演の行き着く先は「形而上学の克服」である。ハイデガーは「形而上学」に対し、「存在」へのアプローチの問題点を指摘する。そして「形而上学」とは別の哲学的アプローチを示し「存在」の把握を目指す。そこで、ハイデガーが「形而上学の克服」をどのように考えているかを明らかにすることで、存在や真理に対する深い理解が得られる可能性があると考えた。よって、ハイデガーがこの講演で何を示しているのかを考察し、正しさを可能にする根拠と、「形而上学」ではない「存在」への向き合い方を示したい。

2. 真理の通念

ハイデガーによれば、真理は通常「知性と事物の『相等 (adaequatio/Angleichung)』である」(ww.180)と規定される。つまり、我々が真とするのは知性と事物が「ぴったり合う (stimmen) こと」である。「知性と事象の相等化」という「真理 (veritas)」の伝統的な本質限定は、二重性格を持つ(同)とハイデガーは述べる。それは「事象の真理 (Sachwahrheit)」と「命題の真理 (Satzwahrheit)」であるが、ハイデガーは「事象の真理」を批判し、「命題の真理」に限定して思索を進めてゆく。

では、「事象の真理」とは一体どのようなものか。これは、「この5円玉は真である」といったように、事象が知性と一致することを指す。この場合、あるものが本物である(事象が真である)と言えるのは、事象とその事象に関してあらかじめ思念されたものが「一致 (Einstimmigkeit)」しているからである。即ち、事象が知性とぴったり合っているか否かでこの真理の成立が決まる。例えば、目の前の5円玉(事象)が予め思念された“真なる5円玉(知性)”にぴったり合う時、我々は目の前の5円玉に対して、「この5円玉は真(本物)である」と言うのである。しかし「事象の真理」は、知性の側に神や理性などの絶対的なものを置いており、これらは存在するものの存在(根拠)となってしまう。例えば、知性の側に神が置かれる場合、“真なる5円玉(知性)”は5円玉のアイデアである。つまり、5円玉を

在らしめているのはアイデア（神の知性）である。このように捉えられた世界では、5円玉に限らずすべての存在するものが何らかのアイデアと一致している。つまり、存在するものはすべて神の被造物であり、存在するものの存在（根拠）に神が置かれることとなる。これは神が置かれた場所に理性を移しても同様である。このように存在するものの根拠に「神」や「世界理性」といった絶対的なものを置くような「事象の真理」をハイデガーは批判し、「事象の真理」を考察の外に置くこととする。そして絶対的なものに根拠を置かない独自の仕方です。「真理 (Wahrheit)」の本質を開示してゆくために、真理を「命題の真理」に制限し、知性と事象の「合致」からその本質を明らかにしてゆく歩み行きを始める。

3. 知性と事物の合致

では「命題の真理」とはいったい何か。これは、「この5円玉は丸い」という命題は真である、といったように、知性が事象に合致することを指す。この場合、ある命題が真であると言えるのは、言表において思念されたものと事象が「合致 (Übereinstimmung)」しているからである。即ち、知性（言表）が事象とぴったり合っているか否かでこの真理の成立が決まる。例えば、「この5円玉は丸い」という言表において、その際思念された「丸い」ということ（知性）と目の前の五円玉（事象）がぴったり合う時、我々は言表（知性）に対して、この言表は真であると言うのである。しかしそもそも言表と事象が「合致」するとは一体どういうことなのであろうか。物質的か否か、金銭の役割を果たすか否か、といったように両者はあらゆる面で相等しくない。にもかかわらず、言表と事象の間の「合致」が成立するのは、以下のように言表（知性）が事象に自らを関係づけるからである。

まず言表が貨幣を表一象し (vor-stellen)、表象されたもの (das Vorgestellte) について、その表象されたものそれ自身に関しては、その都度主導的な見地に従って如何なる事態になっているかを、言う (ww.183-184)

ここで言われている「表一象する」とは、存在するものとしての事象を意識の内に映し出すことを指す。そして、そのように意識の内に映し出されたものが「表一象されたもの」である。我々は意識の内から出られないが、そのようになりながらも、意識の外に存在する〈存在するもの〉としての事象を知覚している。ハイデガーは、人間の意識（知性）の内に映し出される事象、即ち「表一象されたもの」の体験を突破して、〈存在するもの〉としての事象、即ち「表一象する」対象である「事象」を知覚することを「態度」と呼ぶ。このような「態度」をもつことによって人間は、常に意識の内にならながらも〈存在するもの〉としての事象を知覚するのである。

ハイデガーは「態度」について、「存在するものへ開けて立つこと (offenständig zum Seienden)」(ww.184) と述べる。例えば5円玉に対して我々は、初詣という〈その都度の開け〉の中から、〈お賽銭〉としての5円玉に関わる（開けて立つ）。さらに我々はお会計と

いう〈その都度の開け〉の内では、〈お賽銭〉ではなく〈貨幣〉としての5円玉に関わる。このように、我々は〈その都度の開け〉の内からその都度5円玉に対して開けて立ち、その先に〈存在するもの〉としての5円玉を知覚しているが、その5円玉は、〈その都度〉その開けに応じて見せる姿を変えるのである。これが、「その都度」の「態度」で存在するものとしての「事象」に開けて立つ、ということである。さらに我々は、同時に「根源的」な「態度」によって事象に開けて立つのだが、これについては後程述べる。よって、言表する者は「その都度」同時に「根源的」に、〈存在するもの〉としての事象に開けて立っている。これによって知性が事象に自らを関係づけるのである。

では、このように関係づけられた両者が「合致」する（「正しい」「真である」）ことは、いかにして起こり得るのであろうか。我々は事象を「表-象する」際、「態度」によって〈存在するもの〉としての事象に開けて立つことで、事象が「その都度」同時に「根源的」に露になって立ち現れる。そこで言表者は、その「表-象されたもの」を「あるが如くに（so-wie）」言表するよう指示を受け、その指示に従う（同）とハイデガーは言う。つまり「表象されたもの」が〈存在するもの〉としての事象として、言表者に露になって立ち現れるという形で指示を出しているのである。その「指示」に従うということは、言表者が事象に自らを正しく向けるということであり、そのようにして言われたこと（言表）は正しいこと（真なること）である。このようにして言表は真なる（正しい）ものとなる。即ち、開けて立つという「態度」が「正しさ」を可能にしているのである。

このようにして、知性と事象の「合致」という「真理」を可能とするのは「態度」であることが明らかとなった。ここでハイデガーは、真理の本質とされてきた「正しさ」を可能にするもの（「態度」）の根拠こそが「真理の本質」なのではないか、と考える（ww.185）。「態度」は、「或る一つの開け」に既に自身を解き放ち、その〈開け〉の中で、〈存在するもの〉としての事象に「自由（die Freiheit）」に開かれているということによって可能となることから、ハイデガーは「真理の本質」を、「自由」とする（ww.186）。

4. 正しさを可能にする根拠

では、「自由」とは一体何か。この、空け開かれているという意味での「自由」は、～への自由（積極的自由）や～からの自由（消極的自由）に先立つ（ww.189）とハイデガーは述べる。「自由」は、〈開け〉へと自らを自由に開くのではなく、何かから解き放たれることによって開かれるのでもなく、既に開かれている、といった意味での「自由」なのである。

「自由」によって人間は〈開け〉へと開かれており、これによって「表-象されたもの」を突破して〈存在するもの〉を認識することが可能なのである。即ち、「自由」は「存在するものを在らしめる（das Seinlassen von Seienden）」（ww.188）ことである。

ハイデガーはこの「在らしめる」について、通常それはほっておくというような意味を持つが、ここではそうではなく、「開けた場所とその開性とへ自己を関わらしめること（Sicheinlassen）」（同）を意味すると述べている。「関わらしめること」は〈自らを中に入

れる〉という意味を持つため、「在らしめる」こととしての「自由」は、自らを中に入れるという形で〈開け〉へと既に自身を解き放つことであると推測できる。〈開け〉の中で、既に自らを外に曝しだして立つことをハイデガーは、「脱一存 (ek-sistent)」と呼んだ。我々は〈開け〉へと既に「脱一存」していることによって、存在するものを在らしめることに関わっているのである。

人間は既に「脱一存」した状態、即ち〈開け〉へと自らを外へ曝して立つ状態であるが、その〈開け〉の内にある事象から「正しさ」の「標準」を得るためには、その事象を対象化する必要がある。「標準」とは、初詣であれば〈お賽銭〉、お会計であれば〈貨幣〉といったことである。つまり、自由に開かれている状態から、対象を定める状態へと移る必要がある。事象を対象化し、「標準」をとるにはその事象から一步引く、即ち「後退する」ことが必要である。こうすることで事象と向き合い、それによって得られた「標準」が「正しさ」を可能にするのである。

ここまでで自由は、露になっている〈開け〉へ「脱一存」すること、即ち「存在するものが露になっていること (Entborgenheit) へ自らを曝すこと」(ww.189) と示された。しかし「存在するものが露になっている」ということは「存在するものを露にすること (Entbergung)」が前提されている。これには「歴史的人間の脱一存 (Ek-sistenz des geschichtlichen Menschen)」が関係しており、これによって「全体としての存在するもの (das Seiende im Ganzen)」が露現された (ww.189-190) とハイデガーは述べる。これは一体どういうことか。

「歴史的人間の脱一存」が元初的に初まったのは「存在するものとは何であるか」と最初の思索者が問うた、西洋的思惟の元初においてである (ww.189)。その問いにおいて初めて「非覆蔵性 (隠れなさ)」という〈開け〉が経験された (同)。これは「真なるもの」と把握され、ギリシャ語で「アレーテイア」と呼ばれた。(ハイデガーは「アレーテイア」を字義通りに、覆いを剥がすこととして「非覆蔵性」と直訳した。)「問い」によって覆いを剥がし、そこで隠れないものとして思索者に「現前」したものは「自然 (ピュシス)」と呼ばれ、これは出現している「全体としての存在するもの」を指すという (同)。

元初における「存在するものとは何か」という問いに於いて「全体としての存在するもの」が露現された「瞬間 (Augenblick)」(この「瞬間」は後に「時 (Zeit)」と言い換えられる) に、最初の思索者は〈存在そのもの〉に近づき、存在するものが存在するということを理解したのである。我々は〈ある〉や〈存在する〉という言葉を当たり前のように用いるのは、その意味をどこかで知っているからである。それは、元初におけるこの経験が我々に保蔵されているからであり、この「最初の思索者」から続く人間全体が「歴史的人間」である。「歴史」とはその「歴史的人間」の歩みである。よって、この元初による経験も「在るものを在らしめる」ことであり、「自由」なのである。

我々は「歴史的人間」であることによって、〈その都度の態度〉で事象に関わる際にも、その事象を〈存在するもの〉として認識する。つまり、〈その都度の態度〉と同時に、実は

〈根源的態度〉で「全体としての存在するもの」という〈開け〉に既に開かれているのである。ハイデガーは「その都度」か「根源的」かに関わらず、〈開け〉という意味での「露現性」を「現 (Da)」と名付ける。我々人間はこの「現」の中に「脱-存」しつつ「自己を一入り込ませる」存在であり、そのような仕方「現」の中で存在する存在をハイデガーは「現存在 (Da-sein)」と呼ぶ。つまり、人間は認識や判断以前に「現」へと空け開かれており、人間のその認識・判断以前の在り方を「現存在」というのである。

5. 真理の未だ明らかになっていない部分

「現存在」は、「現」へと「脱-存」していることに於いて、「在るものを在らしめる」。しかし、例えば〈この5円玉は丸い〉と言表する際、その5円玉は〈丸い〉ものとして〈存在する〉事象であり、上で述べたような「全体としての存在するもの」の内に在るとは考えないだろう。つまり、その都度個々の〈存在するもの〉を在らしめることに於いて、「全体としての存在するもの」は「隠蔽」されてしまうのである。

ハイデガーは、「在らしめることはそれ自身に於いて同時に、隠蔽することである」(ww.190) と述べる。しかし、我々が自ら「隠蔽」を行うのではない。例えば5円玉に、〈根源的〉同時に〈その都度〉、自らを開いて立つ。この際既に、「全体としての存在するもの」は「隠蔽」されているのである。「現存在」はこの「隠蔽」をそのままにしておき、〈その都度の態度〉に於いてその都度の5円玉を露にする。その結果、5円玉における〈根本的態度〉の行先は「隠蔽」され、人間はその都度の日常的な5円玉に没入する。よって、「在らしめることは、露にしつつ既に隠蔽されたままに留まっており、かくして隠蔽することへ関わっている」(ww.194) のである。

では、この「隠蔽性」とは何か。それは、「存在それ自身 (Seyn)」であると考えられる。これは、「全体としての存在するもの」の、「全体として」の部分、即ち〈存在するもの〉に限定されない部分であり、「全体としての存在するもの」の本質である。「存在それ自身 (Seyn)」は自己隠蔽を行い、これによって「全体としての存在するもの」は隠蔽される、つまり「存在それ自身 (Seyn)」が〈存在するものの全体〉を「隠蔽すること」なのである。

「存在それ自身 (Seyn)」は形而上学が問うて来た「存在するものの存在」からは区別される。「全体として」(「存在それ自身 (Seyn)」) についてハイデガーは「その都度真直に顕わになる存在するものからは、その存在するものが自然の内に属しようと、或いは歴史の内に属しようと、決して捉えられ得ない」(同) と述べる。つまり、たとえ「自然」の内であろうと「歴史」の内であろうと、それが〈存在するもの〉である限り、その〈存在するもの〉から「存在それ自身 (Seyn)」を捉えることは出来ないというのである。この点が、「存在するものの存在」と「存在それ自身 (Seyn)」との大きな違いである。「存在するものの存在」は〈存在するもの〉から捉える〈存在〉である。即ち〈存在するもの〉の根拠であり、形而上学が問うてきた事柄である。対して、「存在それ自身 (Seyn)」は〈存在するもの〉からは捉えられない。「存在するものの存在」に先立って理解されている〈存在〉であり、ハイデ

ガーの思想において重要になる概念である。

「隠蔽性」(「存在それ自身 (Seyn)」の根本動向としての) は、「露にすることとしての真理の方から思惟されるならば、露にされていないことである」(ww.193) とハイデガーは述べ、これを真理の本来的な「非-真理 (Un-wahrheit)」であるという。

さらに、この「隠蔽性」は「アレーテイア」としての「真理」に於いて「露現することを拒絶するとともに、真理を未だなお剥奪として許容せずして、真理のために最も自性的なるものを所有として守っている」(同) とハイデガーは述べる。「剥奪」とは「アレーテイア」の「ア」を指す。忘却ないし覆蔽(隠蔽)としてのレーターの覆いを剥奪するというのである。この「剥奪」を「存在それ自身 (Seyn)」が許容しなかったため、「存在それ自身 (Seyn)」は未だ露になっておらず、最初の思索者に露になったのは「全体としての存在するもの」のみであったと推測できる。しかしハイデガーによると、「全体としての存在するもの」を在らしめる際には「存在それ自身 (Seyn)」が、隠蔽されたものとして、隠れているという姿で現れ出るといふ (ww.194)。つまり最初の思索者たちは、自己隠蔽を行う「存在それ自身 (Seyn)」に出会っていたのである。しかしそれはあくまでも自己隠蔽を行っていたため把握することは出来ず、よって「歴史的人間」には「存在それ自身 (Seyn)」は未だ露になっていないのである。

「在らしめること」は「全体としての存在するもの」が既に隠蔽されたままに留まることで「隠蔽性」へ関わっていると述べた。これは「存在それ自身 (Seyn)」の自己隠蔽へと関わることであり、「在らしめる」ことは「存在それ自身 (Seyn)」を「保有」しているのである。ハイデガーは「在らしめる」ことが保有するこの「隠蔽性」(「存在それ自身 (Seyn)」) を、「秘密」と呼ぶ。つまり、「秘密」とは人間に隠された「存在それ自身 (Seyn)」に外ならない。「脱-存」する「現存在」は、「在らしめること」において、常に「存在それ自身 (Seyn)」(「秘密」) によって「全体としての存在するもの」が「隠蔽」される。ハイデガーは「秘密が秘密として人間の現存在を徹底的に続けている」(同) と述べる。「秘密」が我々を統べることで、「秘密」即ち「存在それ自身 (Seyn)」が自己隠蔽をする限り、〈根源的な態度〉で開かれている事象を捉えることは出来ないのである。

6. 「迷う」人間

「在らしめること」の「隠蔽」への関わりについてハイデガーは、「隠蔽への関わりは、秘密を忘却することに優位を許容し、この忘却の内で消え去る」(ww.195) という仕方で自身を隠蔽する、と述べている。「在らしめること」は、「全体としての存在するもの」が既に隠蔽されたままに留まることで、隠蔽することへ関わっていると先述した。「全体としての存在するもの」の「隠蔽性」、即ち「秘密」(「存在それ自身 (Seyn)」) を忘却するということは、「在らしめること」が「留まる」という形で関係していた「隠蔽」への関係が消え去るということである

よって、すべてに先立って続けている「存在それ自身 (Seyn)」が隠れているという姿で

露になっていることすら忘却の内に消え去る。そして「存在するものがその都度開示されることで、事を済ませている」(同)とハイデガーは述べる。つまり「秘密」の忘却、即ち「存在それ自身 (Seyn)」を忘れ去ることによって、存在するものが表面的に開示されることに我々は安住しているのである。しかし「秘密」は忘却によって消えるのではなく、忘却されたという姿で露になっている。

「秘密」自身は既に自らを「隠蔽」し、我々が「秘密」を忘却して「その都度」のものに安住していることを放置する。その結果人間は〈その都度の開け〉を行き来し、事象からその都度新たな「標準」を得ることを繰り返し、次から次へと慣行のもの(その都度のもの)を転々としながら生きている。そして、すべてに先立つ「全体としての存在するもの」(したがってまた「存在それ自身 (Seyn)」)が忘却されることで、人間は自らの理性を絶対的なものとして存在の根拠に置き、そのようにして自らを存在の根拠だと解釈し「僭越になる」(ww.196)。これによって人間は、自分が何者か分からない不安を解消することができる。このような自分(人間形態)と慣行のものとの関わり合いは認識・判断以前であるが、このように〈その都度〉のものに飛びつく「現存在」の在り方を「執-存 (In-sistentz)」とハイデガーは名付けた。しかし「執-存」の中にも隠蔽され忘却されたものとして「秘密」は続べている。

人間は〈根源的開け〉へ「脱-存」し、「存在するものを在らしめる」ようとも、「秘密」は忘却され、〈根源的態度〉すら隠れてしまう。その場合人間は、「秘密」に背を向けざるを得ない。このように「秘密」に背を向けることで、その都度の慣用のものに飛びつき、自らを確保する。そしてこのその都度のものから離れて、さらに次のものへ向かうが、その際にも同じように、「秘密」に背を向けその都度の慣用のものに飛びつくという、「執-存」という在り方をする。このように「脱-存」「執-存」を繰り返し、「秘密」を素通りしながら回転させられることを、ハイデガーは「迷う (das Irren)」ということであると述べ(同)、その「活動空間」のことを、「迷 (Irre)」としている。しかし迷うこともまた、人間の認識・判断以前である。「迷」の内に入りこむ原因は、「存在それ自身 (Seyn)」が自己隠蔽を行い、「現存在」がその都度の世界に立つことを放置することである。人間が「迷い」ながら生きているのは「存在それ自身 (Seyn)」から起こることなのである。このように「迷」の中に在る我々は、いかにして「真理の本質」を把握することが出来るのだろうか。

「存在それ自身 (Seyn)」を捉えるためには「迷わされない」必要がある。これにはまず、「迷自身を経験」(ww.197)しなければならない。そのためには、「秘密」に向かって「厳格な覚悟」(ww.199)を決めて自らを開かなければならない。これは、我々が存在するものを(理性に於いて)在らしめているのではなく、別の何か人間を含むあらゆるものの根底に既に続べているということを自覚し、その上で支配されている側として、支配しているものに向けて、「厳格な覚悟」をして自らを開くということである。

しかし、「覚悟」は最初の思索者に於いても行われたが、「アレーテイア」の経験に於いて〈存在するものの全体〉は露になったにも関わらず、その本質である「存在それ自身

「(Seyn)」は露にならなかった。これは、「アレーテイア」には〈覆いを剥がす〉という意味があるが、この〈剥がす〉(「剥奪」)を「存在それ自身 (Seyn)」が許容しなかったためである。つまり、「存在それ自身 (Seyn)」が自己隠蔽を行わないようにするためには、この「隠蔽」を〈剥がす〉のではなく、〈許容〉する必要がある。これをハイデガーは「柔和な放下」(同)という。

「厳格な覚悟」と「柔和な放下」の中で、「存在それ自身 (Seyn)」が開かれる「時」を待つ。「存在それ自身 (Seyn)」は対象化できないものであるため、何かを待つのではなく、ただ待つという姿勢を取ることによって、「存在それ自身 (Seyn)」が立ち現れてくるのが「時として起こる」。この立ち現れてきたものを「問う」。ハイデガーは「哲学は或る一つの問うことになる」(同)と述べるが、この問いこそが「存在それ自身 (Seyn)」(「存在」自体)を問う、という問いである。

7. 形而上学の克服

ハイデガーは、「迷自身」を経験し迷わされずに「本質の真理」を問うという方法に、「形而上学の克服」の可能性を示した。すべてに先立って続べている「存在」の歴史の「転換」、つまり「形而上学の克服」への一歩目は「真理の本質は本質の真理である」(ww.201)と気づくことである。「知性と事物の合致」という「形而上学」における「真理の本質」から、真理の未だ露になっていない部分、即ち「統べること」としての「本質の真理」へと問いを転換させることでこそ真なる「真理の本質」が明らかにできるだろう。

「厳格な覚悟」と「柔和な放下」によって、「存在それ自身 (Seyn)」が露になる。これは、こちらが露にしようとするのではなく、ただ待つ、という姿勢である。「存在それ自身 (Seyn)」は対象化できないものであるため、何かを待つのではなく、ただ待つという姿勢を取ることによって、時として「存在それ自身 (Seyn)」が立ち現れてくる。この立ち現れてきたものを「問う」わけだが、対象化できない「存在それ自身 (Seyn)」を問うことは極めて難しいだろう。なぜなら、「これ」や「存在」など、何か言葉を与えようとする、それは存在するものになってしまうからである。また、「これは何か」といった問いは、知性によって〈これ〉を露にしようと「存在それ自身 (Seyn)」の隠蔽を剥奪しようとする「問い」である。よって、より柔和に、より控えめな「問う」という姿勢を取る必要があるのではないだろうか。

「問い」には言葉が必要不可欠である。問うことに於いて人間は、どこまでも対象化を避けられない。対象化された「存在それ自身 (Seyn)」は存在するものとなり、その「問い」は形而上学になってしまう。対象化には認識・判断がつきまとう。しかし、認識・判断を手放すということは思考を辞めることである。そうすると、「問うこと」や「哲学」へと転換することは出来ず、「形而上学の克服」は達成し得ないだろう。認識・判断以前の「現存在」に「存在それ自身 (Seyn)」が時として立ち現れようとも、その露になったそれを認識する、もしくは〈ある〉と判断してしまえば、その際に対象化されたものは存在するものである。

やはり何かを捉えようとする場合、人間にはどこまでも認識・判断から逃れられない「人間」として「問う」他ないのではないだろうか。

では、その「問い」とはいかなるものであろうか。「存在とは何か」と「存在それ自身 (Seyn)」を対象化して問い、そこで生まれてきた言葉をその都度否定してゆく。そうすることで最後に残ったもの、つまりどうしても対象化できない何かこそ「存在それ自身 (Seyn)」ではないだろうか。この「問い」は「存在それ自身 (Seyn)」の隠蔽を剥奪しようとししない。立ち現れた何かと同時に現れてくる言葉をすべて否定し、その何かがあらゆる「存在するもの」である可能性の否定と、存在するものから捉えられないものとして露呈することを行うのである。すると最終的には何も残らない。何も残らないという形で残ったそれ、即ち〈無〉こそ「存在それ自身 (Seyn)」なのではないだろうか。「存在それ自身 (Seyn)」は、言葉にできない、何か分からない、何もない何かとして露になって初めて達成しうるのではないだろうか。

しかしこの場合もまた「存在それ自身 (Seyn)」は、〈無〉〈対象化できない何か〉〈何か分からない何か〉という存在するものとなってしまう危険性を孕んでいる。認識できないものを認識することは非常に困難である。認識や判断から逃れられない人間にとって、このようなものを「問う」という立場は非常に難しいものだろう。

8. 主要参考文献

Heidegger, Martin: *Vom Wesen der Wahrheit (1930)*, *GA9: Wegmarken (1919-1961)*, hrsg. von Friedrich-Wilhelm von Herrmann, 1996, 3. Auflage

ハイデガー, M. 辻村公一訳『道標』創文社、2004年